

On Emerson's "Self-Reliance"

尾 形 敏 彦

I 「自己信頼」の背景

19世紀前半のアメリカで根本的に重要なことは、開拓地拡大、資源開発、現世利益追求というような現実がピューリタニズムを打倒したことである。1820年代にアメリカの社会構造は一大転機を迎え、30年代から40年代にかけて精神的な社会不安がはじまった。その頃、エマソンは万物に共通の霊魂があるという思想（以下、思想という言葉を経容できるかぎり広義に解釈して彼の考えを思想と呼ぶことにする）をもって人びとの不安に対処しようとした。彼の思想は体系をもつ哲学思想ではなく、精神的に動揺してよりどころを求める知識人に対する一種の特効薬的な街の思想であった。エマソン思想は、それにふれる人によって、偉大な思想とも、個人主義とも、汎神論とも、自然宗教とも、ユートピア建設論とも、懐疑論とも、空理空論とも、荒唐無稽な笑い話とも受け取られた。彼は天上の神である大霊を地上の人間世界に移すために、自然を大霊の押印の跡だと自信をもって断言した。若い頃の彼の日記や伝記から判断すると、彼は劣等感に悩む陰気な男で人生を否定的に眺めていたが、1830年頃、自己信頼の精神に目覚めて、楽天的、肯定的な思想を抱くように変った。この変化の原因を考えてみると、青年牧師エマソンの説教が比較的に好評で彼に自信を与えたこともあげられるが、叔母メリー・ムーデイをはじめとして誠実な人びとの意見によって、また、東西の書物から強い影響を受けて、自己信頼の思想に目覚めはじめたと言うことができるであろう。しかし、それと共に、形式的な聖餐式執行の必要性について悩んだ挙句、教会に辞表を提出し、辞職賛成30、反対20、白票4という結果で、彼は牧師を辞任(1832. 10. 28.)するに至

った。彼が懐疑的な態度を見せたのはこの時までで、それも決して懐疑主義と
 いうようなものではなく、彼を懐疑主義者の仲間に入れることは誤りである。
 その直前の9月9日の説教「主の晩餐」(“The Lord's Supper”)のなかで、
 形式は影にすぎないと彼は述べ、聖餐式執行を決定するものはイエス自身では
 なく、儀式を執行する牧師自身の感情だと表明した。10月の最終説教「まこと
 の人」(“The Genuine Man”)に於て、彼は自己信頼をはじめて明確に提唱
 した。もっとも、彼はこれ以前に、「立派な牧師になるためには、牧師職を去
 ることが必要だと私は時々考えた。この職業はもはや時代遅れである。時代が
 変わったのに我々は祖先のすたれた形式で礼拝している。ソクラテス的な異教の
 ほうが老衰して使いものにならないキリスト教よりましなのではあるまいか」

(1832. 6. 2. 日記)とかなりの自信をもって書いている。牧師辞職直後の
 ヨーロッパ旅行で、彼は自己信頼の正しいことを確認した。尊敬の目で眺めて
 いたイギリスの文人達に直接会って得たものは、自分の判断だけが信頼すべき
 重要なものだということであった。そして、パリの植物園でサソリと人間の間に
 さえも神秘的な関係があると感じ、世界は個別的な部分の集合ではなく、万
 物は緊密に結びあっていると彼は悟った。形態では多くの種類があっても、人
 間の心のなかを理解すれば、すべてが理解できると彼は確信した。それは、人
 間の心の奥には神が宿ると悟ったからであった。その時、彼にとっては、外在
 する国家、教会、文化、伝統、社会などの権威は取るにたりないものになった。
 彼は帰国第一声の講演「自然史の効用」(“The Use of Natural History”,
 1833. 11. Boston)のなかで、物質と精神は一体であることを強調した。

彼の生涯のテーマのほとんどすべてを含んでいる処女作品『自然論』
 (*Nature*, 1836. 9. 9. 出版)の冒頭で、「我々の時代は回顧ばかりしている。
 たとえば、祖先の墓を建てたり、彼等の伝記や歴史や批評を書いたりしてい
 る。過去の時代は神と自然を直視したが、我々は彼等の目を通して見ている。
 我々も宇宙と独自の関係を結んでもいいではないか。我々も、祖先伝来のもの
 でなく自分達の洞察の詩と哲学を、過去の宗教でなく啓示にもとづく宗教をも
 ってもいいではないか。しばらく、自然に抱かれ、その生命の豊かな流れが我
 々を貫流するとき、その与える力によって自然に匹敵するほどの行為をせよと

誘われるならば、過去のひからびた白骨のなかを手探りしたり、生きている現代を色あせた過去の衣裳で仮装させるには及ぶまい。太陽は今日も輝いている。野には羊毛も亜麻もある。新しい土地があり、新しい人間がいる。新しい思想がある。我々自身の仕事と法則と礼拝を要求しようではないか」と革新の声をあげた。エマソンはすべての古い関係を清算して新しい世界を創造しようとした。『自然論』のテーマを要約すれば、靈魂を中心に置いた新宇宙の創造である。ついで、『アメリカの学者』(*The American Scholar*, 1837. 8. 31. 講演)のなかで、彼は「あらゆる形式を拒否して無限を望む本性」を「活動的な靈魂」(the active soul)と呼び、これが真理を洞察し、物語り、創造すると述べた。心の奥に「活動的な靈魂」が宿っているという自覚こそ彼の自己信頼の原点であった。エマソンは「自然のどの部分を取り上げてみても、寸分変わらずに靈魂に合致している」(『アメリカの学者』)と述べて、万物がもつ「同一性」(one nature)の存在を主張した。さらに、この講演の終りの部分で、「我々は自分の脚で歩こう。自分の手で仕事をしよう。自分の心を語ろう」というように具体的に自己信頼を説明した。そして、『神学部講演』(*Address at Divinity School*, 1838. 7. 15.)のなかでは、「教会の飢えを批判する思慮深い人びとの押えても眩きになって洩れる声は——道徳的本性から生まれる慰安や希望や尊厳を奪われているために起こるこの心の呻き声は——惰眠を破り、因襲的な現世の喧騒よりも声高く人びとの耳に今こそ届かなければならない」と語って「活動的な靈魂」の声を強調し、古い世界の無用な法則に縛られていては自己確立はできないと主張した。しかし、エマソンが言う自己信頼の新世界が創造できたと仮定しても、それはエマソンの自己満足ではないかという疑問が提起されるであろう。

II 『論文集Ⅰ』の「自己信頼」の章について

『論文集Ⅰ』の「自己信頼」の章を構成する支柱は「活動的な靈魂」と「同一性」とである。過去に原理を作った人びとは例外なく「活動的な靈魂」をもっていたとエマソンは言う。たとえば、「無条件で信頼できるものが心のなか

にあって、手を通して活動し、自分の存在のすべてを支配していると彼等は信じていた」(「自己信頼」)とエマソンは書いている。さらに、一つの地下茎(one root)によって、万物に共通する「同一性」の存在を見抜くものもこの「活動的な靈魂」であり、この靈魂が心に宿っていることを自覚してはじめて自己信頼の思想を確立できるとエマソンは考えた。「自分の卑小さを悟った私に神が与え給うたこの快適な森のなかで、毎日、未来に目を向けたり、過去をふり返ったりすることなく、心に浮かぶ思想をありのままに記録するならば、意図しなくても、よく見えなくても、それは必ず均整がとれたものになることを私は疑うことができない」(同上)と書き、さらに、「私にとっては、心の法則以外にどんな法則も神聖ではあり得ない。善や悪はただ名目にすぎず、どちらにでも容易に変えることができる。正しいものはただひとつ、私の心に従っているものだけであり、不正なものもただひとつ、私の心にさからっているものだけである。人間ならば、どんな反対を前にしても、自分以外のものはすべて名目にすぎず、直ちに消え去るものであるかのように振舞うべきである。我々が記章や名前に対して、有力な団体や死んだ制度に対して、即座に屈服してしまうのを思うと私は恥づかしい。誰であろうと、身だしなみがよく、言葉づかいが上品な人に、私はつい不当なほど心を動かされ、支配されてしまう。私は生気に溢れて正道を歩き、あらゆる方法で齒に衣をきせない真実を語らなければならない」(同上)と述べた。しかし、思うことをありのままに語れば不調和や混乱が生まれるであろうが、エマソンは彼独特の「同一性」によって常に問題を容易に解決した。つまり、「同一性」が原因であって、「多様性」は結果だと彼は言ったのである。「科学とは最も遠い部分相互の間に類似を、すなわち、『同一性』を発見することにはかならない」(『アメリカの学者』)と語り、「万物は解体されると永遠に神聖な唯一者に帰るとのことこそ、あらゆる問題の場合と同様に、自己信頼という問題の場合にも、ただちに理解される本質的な事実である」(「自己信頼」)とエマソンは述べた。彼の自己信頼とは、外部の権威に惑わされることなく、心に宿る「神」に絶対的に服従することであった。「自己信頼」でエマソンが信頼せよという「自己」とは他人と区別される自己ではなく、人びとの心の奥に宿る「万人共通の自己」、すなわち、

「神」のことである。それゆえに、自分の思うままに生きても無軌道になるはずがない。各人が自分の心を信頼すればするほど、他人の心とよりよく一致するといのである。このように楽天的な考え方が成立したのは、世界は窮極的には合法則的なものだとか彼が信じたからにはかならない。彼は躊躇なく自分の直観を洞察だと信じることができた。自分の心の奥に宿る靈魂に直面すれば、結果にすぎないエマソン自身はその場で消滅し、実在である神が出現すると彼は信じた。つまり、私的な自己が公的な神に変わるというのである。

エマソンは、『自然論』、『アメリカの学者』、『神学部講演』というエマソン思想を確立した（これ以後、本質的にはエマソン思想は変化も進展もなかった）初期三部作のなかで自己信頼を絶えず強調してきた。その強調は、繰り返しのことによって印象を強めるという単純な技巧を過剰に使うことであった。彼は、「自分の思想を信じるべきだ。自分の心のなかで真実だと思うことは万人にとっても真実だと信じるべきだ」（同上）と述べ、「自己を信頼せよ。その鉄の弦が響けば、すべての人の心がそれに感応して震える」（同上）と呼びかけた。これらの言葉は福音書が与えるような感動を当時の聴衆に与えた。後に、マシュー・アーノルドは『エマソン』（*Emerson*, 1883, 旅行中ボストンにおける講演）のなかで、アメリカ人はすでに自己信頼の程度が強すぎるのではないかと質問した。この質問は人間の神性という問題に関係があり、エマソン思想の核心にふれた質問であった。エマソンは、「私が『心だけに従って生きていれば、伝統の神聖さなどと私はまったく関係がない』と言うと、友人はこんな風に言った——『しかし、こういう衝動は上から与えられたものではなく、下からのものかも知れない』と。私は『そういうものだとは思わないが、もし、私が悪魔の子なら悪魔に従って生きるまでだ』と答えた。私にとっては心の法則以外にどんな法則も神聖ではあり得ない」（「自己信頼」）と書いているが、悪魔に従って生きるというのは単なる修辞で、悪魔の子などとエマソン自身まったく考えず、悪魔をもち出して自分の心が神聖であることを強調したにすぎない。このエマソンの強烈な自信はどこから生まれたのであろうか。

「普遍的な信頼の根源かも知れない本来の自分自身をたずねると、『根源』、つまり、内在する靈魂の本質であり、美德や生命の本質でもあり、『自発性』と

か『本能』とか呼ばれるものに自然に辿りつく。意識ができた後に与えられた教えは他人から受けたものである。それに対して、この根源の知恵は『直観』と呼ばれる。この深遠な力、分析しつくせない窮極の事実のなかに、万物は共通の根源を見出だすのである」（同上）と言って、彼は直観に頼るが、すべてのものに共通する根源だと彼が断定するものは、結局、キリスト教の神に帰着するように思われる。それでは、神と人間の間をエマソンはどう考えたのかを日記から引用してみよう。エマソンは1829年3月11日に副牧師に就任して間もなくウェア牧師引退のあとをうけて正牧師になったが、慧眼なウェア牧師はエマソンのあまりにも自由な考え方に大きな危惧の念を抱いていた。エマソンが「我々の心に宿る神が、神を礼拝するのだ」（1831. 7. 15. 日記）と短く自分の気持を書いているのを見ると、彼は最初から教会の牧師には不適當であったと思われる。ヨーロッパ旅行の帰途に、「最高の啓示は、神がすべての人びとの心のなかに存在するということだ」（1833. 9. 8. 日記）と書き、さらに、「神は心のなかにいますという信仰に目覚めると、教会や祈禱は無用ではないか。礼拝というものは、神が神自身と一致していないということ、神が二つあるということを明言しているのではないか」（1834. 8. 17. 日記）と書いて、キリスト教会に挑戦さえもしている。そして、「個人の肉体として現われている神こそ、社会生活における完璧な法則である」（1836. 2. 日付なし、日記）と書き、「神が心のなかに住むことを私はまだ知らないのだろうか」（1837. 7. 26. 日記）と自分を戒めている。目に見えない抽象概念である神が人間の肉体として現われているという驚くべき考えをエマソンは抱いたのである。彼があれほどの自信をもって自己信頼を高らかに説いた根拠は、この人間の神性というところにある。自分を信じるとは、自分の心のなかの神を信じることであり、「自己信頼」とは「神信頼」にはかならない。

「すべての過去の世紀は、共謀して靈魂の健全と権威を阻止しようとしている。時間と空間は目が作り出す生理的色彩にすぎないが、靈魂は光であり、靈魂のあるところは昼の世界で、かつて靈魂があったところは夜の世界である」（「自己信頼」）とか、「人間も時間を越え、現在のさなかに自然と共に生きるものでなければ、幸福になることも強くなることもできない」（同上）とか、

「靈魂はすべての経験に反対して時間と空間を否定する。たいていの人の場合には、感覚が精神を圧倒しているために、時間と空間の壁は乗り越えられない実体のようになっていて、これらの壁を軽々しく語ることは狂気のしるしになっている」（「大靈論」）などと言うのをみれば、樂園追放は時間と空間のなかに投げ出されたことだから、エマスの考え方は樂園復活論だという意見も出てくるのであろう。しかし、エマスは無条件に自分自身を信頼したわけではない。正直で自然ならばという条件をつけたのである。それゆえに、自己信頼から人を遠ざける原因は、矛盾しないように努力する態度だと彼は考えた。合理的な手段で処理できなければ非合理的な手段に訴えるというのは自己防衛の常套手段だが、それは現実を否定しようとする矛盾した手段である。これは現実を歪めるから正直でもなければ自然でもないが、エマスの世界ではすべてが大靈に帰一されるから矛盾が生まれる余地はないのである。

III 「自己信頼」の長所

エマス思想は、カーライルを通してであるが、カントやシェリングなどのドイツ観念論の影響を強くうけた主観論である。彼が形式主義と闘って自由な精神を追求したのは、当時では極めて革新的であった。その影響をうけて、ソーロウやホイットマンなどの文人が登場し、アメリカ文化に自由な雰囲気を与えた。1830年代のエマスにとっては自己信頼という考えが最も重要であったので、彼は一貫して自己信頼を説き続けた。彼は客観性ということには注意を払わず、主観的真實にのみ固執した。この点にエマスの単純さと楽天性が見られる。個人であることをやめて普遍者になろうと志したエマスは、自分が信じるままに行動すれば全世界は同調してくると驚くほど楽天的な結論を出した。しかし、エマス自身は、こう信じることによって、自分の精神を充実させ、宗教的にも救われた。このことは、結果的には、彼が極めて实际的であったことを示している。要するに、神はすでに廃墟になった教会を見捨てて、人間の心のなかに転居したと彼は言うのである。「靈的なものが人間の心のなかにあることは明らかである。昔の賢明な格言に、『神は鈴を鳴らさずに我々に

会いにくる』というのがある。つまり、我々の頭と天との間には仕切りも天井もない。それと同様に、結果にほかならない人間が消滅して、原因である神が行動をはじめるといふ霊魂の内部にも仕切りや壁はない」（『大霊論』）とエマソンは考えた。このように、彼は形式を否定したのであって、信仰を否定したのではない。教会に代表される因襲的な形式や制度などを排除したあと、それに代るものをエマソンは求めた。それが自己信頼であった。当時の知識人は、神から神秘性を除き、キリストを単なる宗教的天才と見なしたユニテリアニズムによって精神的に混乱した。それを救ったものが、自己を信じさえすれば救われるというエマソン思想であった。エマソンの精神世界が現実世界と相容れないことは明らかである。「自己信頼」は社会が嫌うものだと言った。人間でありたい者は、順応ということと縁を切らなければならず、世間体を気にして偽善的な寄付などをしてはいけないのであり、過去のものごとを崇拜するような態度をもってはいけないのである。しかし、こういう精神一辺倒の考え方は、社会状況が変わって主観的真理に固執できなくなった1840年以後になるとまったく通用しなくなった。その頃になってはじめて、エマソンは彼の精神世界が現実世界と相容れないことに遅ればせながら気づいた。たとえば、主に1851.

3. — 4. に行った講演からなる『処生論』(*The Conduct of Life*, 1860 出版)のなかではこう書いている。「精神は必ず宿るべき家を作るが、後にはその家が精神を束縛する」（『処生論』）とか、「およそ人は生まれながら精神的傾向、または物質的傾向のいずれかをもっている——同じ母から生まれた兄弟にしてなおこの相反する宿命をもっている」（同上）とか、「一人の人間には、神と悪魔、精神と物質、王と裏切者、結束と拡散があって、それが各人の目なり頭のなかなりで衝突しないで並存している」（同上）とか、「物質と精神は、たえず馬上で試合をしては、また、立ち直って平衡を保っているようなものである」（同上）とか、「人間であることに付随するいろいろな謎を解く鍵、難問解決法はひとつだけある。すなわち、二重の意識を提起することである。人は私的な本心という馬と公的な本心という馬に交互に乗りなければならない」（同上）というようなことを言っている。こういうことを言うエマソンは、世間的な労苦をなめてきた人なので、心の奥では、それだけ強く敗北感を

もったことだろうと思う。彼は絶対的な真理の王国を建設するために、実現不可能な仮説によって勝負に出て完敗した。彼は物質を影にした精神世界を示した一元論を説いたが、現実世界を扱う時には、動と反動、闇と光、収縮と拡張、求心と遠心、精神と物質、男と女、奇数と偶数、主観と客観、上と下、肯定と否定などのように二元をもって解釈した。たとえば、「世界は二元的だが、世界を構成する部分もすべて同様である」（「報償論」）と言い、「おなじ二元性が人間の本性と状態の基礎になっている」（同上）などと説明している。しかし、思想的に右往左往した当時の多くの知識人にひとつの仮説を提供したところにエマソンは長所がある。エマソンは書物に対しても、伝統に対しても挑戦し、自己信頼の思想によって当時の宗教界を揺さぶった。「精神の声は誰にとっても親しいものだが、我々がモーセやプラトンやミルトンの最もすぐれた長所だと思う点は、彼等が書物や伝統を無視して、他人ではなく彼等自身が考えたことを語ったという点である」（「自己信頼」）と彼は言った。これは書物や伝統を無視せよと彼が言っているのではない。書物や伝統が教えるところをひとたび自分のなかに取り入れて、それを忘れ去れば、それが独特のものに変化して再出現すると彼は言ったのである。これは、「一粒の麦、もし死なずば……」（ヨハネ12：24.）とか「あなたの蒔くものは死ななければ生かされない」（コリント前書15：36.）などという聖書の言葉が示す復活の奥義に通じるものである。読んだ本の内容を忘れても、種子が残って花を咲かせ実を結ぶというのである。「天才の作品を見ると、我々はいつも自分が見捨てた思想が含まれていることに気がつく。かつては自分のものであった思想が、ある縁遠い威厳を備えて戻ってくる。偉大な芸術作品が我々に与える教訓のなかで、これほど感動的なものはない。世間がこぞって反対の叫び声をあげる時こそ、にこやかながら断呼として自分の心から湧き出てくる印象に忠実であれと、それは教えてくれる」（「自己信頼」）というように語るエマソンの言葉は物質だけを信じる人びとには理解できないものである。これは絶対的真理である神に直面する人びとにして、はじめて理解できるものであろう。

IV 「自己信頼」の短所

エマソンは、キリスト教が神への絶対的信仰を説くのに対して、自己信頼を説いた。そして、自己信頼を妨げるものとして、「社会」と「自己矛盾を恐れる心」とをあげた。「どんな社会も、その構成員が人間らしくなろうとすると共謀して妨害する。社会とは合資会社にほかならない。社員は出資者に平等にパンを確保するために、パンを食べる者の自由や教育を犠牲にする。社会が最も強く要求する美德は付和雷同ということであって、社会が最も嫌うものは自己信頼である。社会が愛するものは真実や創造ではなくて、名目や習慣である」（「自己信頼」）と彼は社会を批判し、さらに、社会は決して進歩しないと断言した。「社会は決して進歩しない。一方で力を伸ばしても他方では後退する。絶え間なく変化する未開世界であると同時に文明世界である。キリスト教によって豊かな世界であると同時に科学的で物質だけを求める世界である。この変化は改善とは言えない。与えられると、なにかが奪い取られる」（同上）と彼は社会を批判した。

しかし、エマソンは「自己信頼」の終りの部分で、「人が勝利者になるのが見えるのは、その人が外部の支えをすべて捨てて一人立ちする時に限られる。その人が掲げる旗印に新しい支持者が加わるたびにその人は弱くなる。人間は町よりも立派な存在ではないか。世間の人びとになにも求めなければ、変転のなかでただ一人不動の柱であるあなたは、やがて、あなたを取り巻くすべてのものの支えになるに違いない」（同上）と書いている。このような考え方は、個人が社会を建設するという開拓者の考え方と同じである。エマソンは必然的に社会と関係をもたなければならない人間のよりどころとなるべき自己を常に強調した。恐らく、彼自身の幼少時代からの苦い経験があったからではないかと思われる。

「すべての貧民の生活を楽にしてやるのが私の義務だなどと言ってももらいたくない。一体、彼等は私が助けなければならない貧民なのか。愚かな慈善家のあなたにはっきり断っておくが、私の仲間でもなく、私とその仲間でもないよ

うな人に1ドルでも、10セントでも、1セントでさえも与えるのは惜しいことだと思う。……あなた達の多くの慈善事業や、大学の愚者教育や、多くの人びとが固執する無駄な教会建設や、酔っぱらいのための義援金や、その千倍もの救済団体——恥づかしいが、実は私もそれに寄付することがある。しかし、そういう金は悪い金で、そのうちに勇気を出して差し控えるつもりでいる」（同上）というように、エマソンは精神的な仲間と、そうでない人びととを区別して、自分と無関係の人びとを攻撃する。恐らく、エマソンは世間の実状をよく知っていたから、同志を守ろうとしたに違いない。しかし、同志の間では、自分自身の重要性を強調すれば理解して貰えたかもしれないが、社会の大部分を占める同志でない人びとには、エマソン自身が攻撃しているように、理解して貰えなかったと思われる。自己信頼を妨げる主なものとして、まず、社会をあげたのは彼自身が社会のもつ大きな力をよく認識していたからにほかならない。エマソンは社会の人びとに向かって、真の人間は妥協や順応とは縁を切り、自分自身以外に神聖なものはないと確信すべきだと説いたのだが、社会改善策ということになるとなにも言わなかった。理論は社会が教えたものだから、エマソンから見れば無用なものであった。彼は理論ぬきで直観に頼れと言い、自分自身がひとつの社会になれと言った。社会と並んで自己信頼を妨げる第二のものは「自己矛盾を恐れる心」であった。「自己信頼から我々を遠ざけるもうひとつの恐怖の種子は、矛盾しないように心がける態度である。他人の目は我々の軌道を推測するのに、我々の過去の言動以外に判断の材料をもっていない。我々も彼等を失望させたくないで、我々の過去の言動を崇拜しようとする。……公的な場所での言明に矛盾するのを恐れて、記憶の屍体をなぜ引きずり廻すのか。かりに自己矛盾に陥っても、それだからどうなのだ。自分の記憶だけに頼らないで、記憶が純粹に作用するときでもほとんどそれに頼らないで、千を数えるほどの目を備えた現在のなかへ過去を引き入れて審判を仰ぎ、常に新しく生きることが知恵者の辿るべき道だと思う。形而上学的には神の人格を否定しても、靈魂の敬虔な衝動が訪れた時には、色と形で神を飾ることになっても、身も心もその衝動にゆだねなければならない」（同上）と彼は断言した。靈魂の衝動が訪れた時に直観に頼れば矛盾が起ることもありうる

が、エマソンはそれを矛盾とは言わなかった。長い目で広く見渡せば均衡がとれていると彼は考えた。自分が評価するのではなくて他人が評価するのだから自己矛盾を恐れることになるのだが、自己信頼が外部の権威を否定する以上、自己矛盾を恐れる、つまり、他人の目を恐れる必要はないとエマソンは言うのである。彼は「愚かな首尾一貫は小心が作り出す妖怪で、小心の政治家や哲学者や宗教家が崇拝するものである。首尾一貫などは大人物には無用である。壁に映る自分の影にでも関心をもつほうがましなくらいだと思う。現在思っていることを厳然とした言葉で語りたまえ。明日は明日思うことを、たとえ今日語ったことと矛盾しても、再び厳然とした言葉で語ればいい」（同上）と主張した。しかし、こうなると、エマソンの自己信頼の構造には人間の相互関係が欠如していることになるが、彼の真意は、硬直し形式化した現実社会を否定して理想社会を建設するためには、各人が全人的に活動しなければならないということで、そのためには自己信頼が必要だと言うのである。各個人の心の奥に宿る「靈魂」が直観によって「大霊」（Over-Soul）と意志を交流させる社会、つまり、直観の機能を阻止するものがない社会を彼は考えていた。エマソンの自己信頼とは、理想社会の建設に立ちあがる行動主体としての人間のとるべき基本的態度のことである。しかし、彼はこの理想社会建設のヴィジョンを具体的にはなにも示さなかった。彼は理想を示したかもしれないが、それを実現するための実際的な方法をなにも示さなかった。モーセのように（ヨハネ伝1：17.），エマソンは本体の影をさし示す律法を与えたにすぎなかった。エマソンの『随筆集Ⅰ』は、確かに一時的な影響力をもっていた。一時的とは、雰囲気的ということであって、人間を根本的に変革する力をもっていない。エマソンは力不足で具体的な計画を示せなかったと言うよりも、彼自身その必要を感じなかったと言えよう。「原因と結果とは、ひとつの事実のふたつの側面だ」（「円環論」）と言い、「改革の恐ろしさは、自分の美德、あるいは美德だと思ってきたものを、これまで、ひどい悪徳を焼きつくしてきたのと同じ洞窟に投げずてなければならないことを発見することである」（同上）と書いた。

エマソンの最大の欠点は価値判断の基準があいまいなことである。彼は自己信頼の必要性について繰り返し主張するが、その具体性ということになると不

明である。エマソンが積極的に自己信頼を主張するにつれて、彼は個人主義的、非社会的になるだけである。矛盾を恐れるなど説くエマソン自身が矛盾に満ちていたから、彼の主張は自己弁護にすぎないように思われる。前記の「善や悪はただの名目でどちらにでも変るものである。結局、すべては真理に帰一してしまう」とか、「善人は弱さや欠点さえも味方にする。……われわれの強さは弱さから生まれてくる」（「報償論」）というような楽天的な言葉は彼の文章のなかに驚くほど多く発見される。悪についてエマソンは多くを語らない。彼は人間の神性を主張したが、人間の悪魔性を理解しないふりをした。悪を語らない彼は、悪の存在をよく知っている苦勞人エマソンの仮面の姿にほかならない。彼は言葉で奴隷制度に反対はしても、実行力をもつ社会改革家ではなく、良識派の一人という範囲にとどまっていた。彼は個人主義者だからとか、苦勞人で社会をよく知っていたからとか、その他いろいろな理由があげられるかも知れないが、奴隷制度というような社会問題に関する知識を十分にはもっていなかったのであろう。奴隷解放問題では、エマソンは個人としての意志表示をするにとどまって傍観者の態度をとっていた。彼は「もし、怒り狂った頑固者が奴隷制度廃止という愛情に溢れる主張を一手に引きうけて、バルバドスから最新の情報を伝えに私のところへ来たならば、彼にこんな風に言ってもいいだろう。『さあ、あなたの子供を愛しなさい。あなたのために薪を切ってくれる人を愛しなさい。温厚で慎しみ深いという美德だけはぜひ身につけなさい。千マイルも離れた黒人達に信じがたい思いやりを与えることによって、苛酷で無慈悲なあなたの野心を飾り立てたりしないでください。遠くに向けられるあなたの愛情は身近な者には恨みです』と。こういう挨拶は恐らく粗野で無作法であろうが、愛を気取ったりするよりも真実のほうが立派である。あなたの善良さにも少しは鋭い刃がついていなければならない——そうでないとなんの意味もないからである。愛の教えが泣きごとを並べ立てたら、その反作用として憎しみの教えが説かれなければならない」（「自己信頼」）と書いた。多少極端かも知れないが、エマソンは奴隷制度廃止論者を博愛主義者の仲間押しやり、冷静な様子で自分を真実の側に立たせた。彼は真実を見出そうとしないで、憐れみの目で相手を見たにすぎない。こういうところにも明らかにエマス

ンの自己矛盾がある。しかし、「自己矛盾に陥っても、それだからどうなのだ」(同上)と彼は開き直って、「偉大だということは誤解されるということだ」(同上)と言い逃れている。「どれほど多様な行動でも、その時に応じて正直に自然に行なわれさえすれば、恐らく符合するところがあるはずだ。ひとつの意志から出ているので、一見、まったく似ていなくても、それらの行動はやがて調和するからである。少し距離をおいて、少し高い見方をすれば、それらの相違は見えなくなる」(同上)と言ったところなどは、エマソンは高い見方ができる人だとしても、なにか言い捨てたという感じがしないでもない。彼は「エマヌエル・スウェーデンボルグの認識力の偉大さを示すには、おそらく彼の高邁な文章ひとつで十分であろう。——『自分の氣にすることが確信できて、それは彼に理解力がある証拠にはならない。真実であることが真実で、偽りであることが偽りだと認識できること——これこそ知性の証拠であり特性である』と彼は言っている」(『大霊論』)と書いている。こういう主観的すぎるような印象は、彼の歴史観において最も顕著である。ヨーロッパの歴史を無視すればアメリカ文化の内容が無になるから、創造という優越性と歴史的遺産とを同時に自分のものにすることをアメリカ人は歴史に要求した。この要求に対するエマソンの答えが『論文集Ⅰ』の「歴史論」である。そのなかで彼は超自然な英雄主義による歴史観を展開した。「もし、歴史全体が一人の人間のなかにあるならば、すべて個人の経験から説明されなければならない」(「歴史論」)とか、「人は歴史が読まれる観点を、ローマ、アテネ、ロンドンから自分自身に移さなければならない。自分こそ法廷であって、イギリスやエジプトがなにか言い分をもつならば、事件を審判してやるという信念を捨ててはならない。要するに、歴史とは万人が認めた寓話にはかならない」(同上)などというように、彼は貴族主義者であって、一般大衆と共にというような考えをいささかもっていない。また、歴史の意味は、個人の意識によって理解されなければならないが、そのためには、多くの準備が必要である。しかし、歴史学の素人エマソンは「歴史論」においても、安易に自己信頼の精神をもって断定的に歴史を処理した。彼は学問の細分化反対論者だから専門家の価値を認めないのは止むを得ないかもしれない。「真の人間は誰でも、原因であり、国家で

あり、時代であり、自分の構想をすべて実現するために無限の空間と時間とを要求する。——後世の人びとは彼のあとから従者のように従って行く。シーザーという人物が生まれると、それ以後、長い間、ローマ帝国が続く。キリストが生まれると、幾百万の人が、彼の靈魂にすがり、キリストが美徳や人間の可能性と混同されるようになる。ひとつの制度は一人の人間の影が長く延びたものである。たとえば、修道院制度は隠者アントニーの、宗教改革はルターの、クエーカー派はフォックスの、メソジスト派はウエズレーの、奴隷制廃止はクラークソンの影である。ミルトンはスキピオを『ローマの極致』と呼んだ。歴史全体は、極めて簡単に、勇敢で熱意溢れる少数者の伝記に還元されてしまう（「自己信頼」）というように、あまりにも単純明快に歴史を補えすぎている。しかし、すべての対象をこのように簡単に直観で補えるところにエマスの強さがあり、同時に彼の脆さがある。もっとも、エマス自身、あまりにも英雄中心の歴史観を表明しすぎたためか、反省の言葉を洩らしている。「国王や貴族や大地主が、自分の法律に従って闊歩し、人びとや事物を世間の尺度ではなく自分の尺度で評価して、恩恵の代償を金銭ではなく名誉で支払って、法律を自分の一身に体现するのを、至る所で人びとは許してきたが、こういう進んで忠勤を励むことこそ人びとの権利と美しさの自覚であり、各人が権利を意識していることを示す一種の象形文字であった」（同上）と彼はいささか取ってつけたように書き加えた。

エマスに対する批判は、当時から現在に至るまでかなり多い。たとえば、ホーソンは「エマス氏の近くに住んでいると、彼の高峻な思想の山の気を多少とも吸いこまずにはいられなかった。新しい真理は新酒のように利くから、一部の人びとの頭は妙にふらふらしたらしい。小さな田舎の村が、これほど多様で奇妙な服装をして、変な挙動をする人びとに悩まされたことは今迄になかった。しかも、その大部分の人びとは世界の運命の担い手だと自惚れていたが、実はなんとも手がつけられないほど人をうんざりさせる連中であつた。彼が言わない言葉まで吸いこんで独創性を身につけようと、この独特の思想家の周囲に集まってくる連中とはこういうものであつた」と言った。ホーソン夫人はエリザベス・ピーボディの妹で、結婚前からエマスを尊敬していたが、

ホーソン自身はエマスの思想、とくに、その楽天主義には我慢ができなかった。二人とも孤独を愛し、冷静な人物であったから、コンコードの町に住んでいても親しくはつき合わなかった。エマスのほうは小説嫌いであり、まして罪の追求がテーマであるホーソンの作品には興味を示さなかった。エマスの友人でメソジスト派の牧師エドワード・テイラー (Edward Taylor) は、友情をこめて、「エマス氏は神が作られた最も優しい人だが、彼の構造にはどこかネジのゆるんだところがある。私にはそれがどこかわからない。きしんでいるのを聞いたことがないからだ。彼は天国へ行くに違いない。もし地獄へ行けば悪魔は彼をどう処置したらいいか途方にくれるだろう」(キャボット『エマス伝』James E. Cabot: *A Memoir of Ralph Waldo Emerson*, 1887, p. 328.) と言った。ヘンリー・ジェイムズは、この伝記を書評した時、エマスがシエリー、ディケンズ、ダンテ、ジェーン・オースティン、『ドンキホーテ』、アリストファネスなどを無視した点や、偉大な芸術に接して無感動であった点にふれて、「エマスのなかには全然振動しない弦があった。…いや、ある種の弦が欠けていた」と書いた。この言葉はエマスの善良さを言ったものに違いない。しかし、W・C・ブラウネルはホーソン同様に、「われわれが知っている生意気な人間は、ほとんどすべてエマス宗派の連中だ」(『エマス論』)と批判した。エマス思想と深い関係をもつのはアーヴィング・バビット、P・E・モア、ノーマン・フォースターなどに代表される新人文主義 (Neo-Humanism) の人びとである。エマスは現世の流動変化を超越し、多と相対は錯覚で一と絶対が真実だと主張し、威厳と栄光を与える直観を捨てて相対の自己に執着すれば人間は物質に墮落すると説いた。人間が物質の法則に従えば物質に支配されるというエマスの「直観」を新人文主義者は重視した。エマスが西洋の特性を多と相対に、東洋の特性を一と絶対にあると考えたように新人文主義者も考えて東洋思想に惹かれた。それにもかかわらず、彼等とエマスとは本質的に相違している。それは、新人文主義者の主張の中心が欲望の抑制に置かれていた点と、社会は個人が建設するという開拓者の考え方をエマス思想はその背景にもっていたが、新人文主義者の思想にはそういう背景がなかった点によるのである。

V 結 論

エマソンは常に高踏的な調子で多くの比喩を交えながら語った。彼は直観によって結論を掴み、それに到達するようにエマソン流の理論を組み立てた。その理論は理論とは言い難いようなもので読者に抵抗感を与えるところがあり、その調子は思想家の調子というよりも煽動家の調子になっている。さらに、彼の自己信頼は自己満足とあまりにも距離が近いために、エマソン思想は孤立していて、議論に価しないと言っても過言ではないかもしれない。好意的に見ると、彼は人間に対する認識を純粋化しようと努力するあまり認識そのものを誤ってしまったのかもしれない。「私的な目的を実現するための祈りは卑劣であって盗みにひとしい」（「自己信頼」）と語るエマソンには、利益を求める個人の幸福は全体の幸福につながり、全体の幸福があって個人の幸福が生まれるというような常識は通用しない。「自己信頼」の終りの部分でエマソンは、「政治上の勝利、地代の騰貴、病気の回復、旅に出た友人の帰郷、その他こういう嬉しい出来事は人を元気づけ、幸福な日々が訪れようとしていると考えさせる。しかし、そういうことを信じてはならない。平和をもたらしことのできるものは自分自身以外にはないからである」（同上）と言った。彼のこの考え方を批判するか評価するかは、自己信頼と自己満足とを切り離しうるか否かにかかっている。しかし、実際には常識的なエマソンは「私は気儘な考えを述べ、勝手な思いを語って誰かを誤らせることがないように、自分がただの実験者にすぎないことを読者に注意しておきたい。私がすることに対しては、いささかの評価もしてもらいたくない。私がしないことに対しては、いささかの不信も抱いてもらいたくない。そんなことをしては、私がなにかを真実だとか偽りだとか断定しようとでもしているようになってくる。私はなにものも不定だと考えている。私にとって神聖な事実のひとつもない。冒瀆的な事実もない。私はただ実験するだけである。背後に「過去」を背負わないで限りなく探求を続ける者である」（「円環論」）というようなことを述べて批判されることを避けている。あるいは、エマソンはこう言って自己信頼の精神を堅持するようにすすめる。

ているのである。

ここで思い出さなければならないことは、自己信頼とは神信頼ということであって、自己満足とは縁がないということである。エマソンが彼の同志の間でさえも、ある程度まで理解されるにとどまったのは、彼自身が人間よりも神に近いことを望んだからにはほかならない（『エマソンとソーロウの研究』風間書房参照）。エマソンが新しい精神世界の建設を思い立ったのは、彼の自信過剰と幼少時代の家庭環境の影響が大きかったからであろう。しかし、エマソンに多少のカリスマ性があったとしても、牧師という彼の家庭環境が禍いして、彼は新興宗教の教祖にはなれなかったと思われる。彼は死後の世界を見てきたというような荒唐なことを真面目に言った世界最大の霊媒スウェーデンボルグのカリスマ性に圧倒されて、この霊媒を代表的偉人のひとりに祭りあげたが、カリスマ性をもつことはエマソン自身の憧れでもあった。また、エマソンは宗教界の改革者ではあっても、社会の改革者ではなかった。彼は社会の本質を理解できず、宗教界と言っても、キリスト教という限られた領域内の改革者であつたにすぎない。しかし、彼がその改革精神を一部の文化人に伝えて当時のアメリカ文化の一角に改革の新風を吹きこんだという点は評価できる。彼は自分の心の声を神の声だと信じ、現在の自分だけが価値をもち、過去や未来のなにも現在の自分に関係がなければ価値がないと考えた。エマソンは首尾一貫を軽蔑し、論理の矛盾を恐れず、個人の神聖と、良心、本能、直観の重要性だけを信じた一種の神秘主義者であった。